灰かぶり君 =後篇=

渡里あずま

灰かぶり君 =後篇=

渡里あずま（表紙　inika）

どうしてこうなった

「いい加減にして下さい」
両手と膝を立てた右足で、ガッチリガードしながら言った俺に、会長が目を丸くする。
でも、俺は油断しない。いや、そもそもが強引に連れ込まれたとは言え、こんな密室――観覧車で、会長と二人きりになった俺が悪いんだけど。
「俺は、会長様のことは好きじゃありません。だからキスされても嬉しくありません……まだ解りませんか？その目とか耳とかは、綺麗なだけの飾り物ですか？」
俺の上からどけてくれない会長に、ついつい口調がきつくなるのが解る。
いや、だって真白とか親衛隊なら解るけど、何で俺にまで手を出すよ。今日までほとんど接点ないだろうが。節操無しにも程があるだろう？

「……よ」

そんな俺の上から、ポツリと会長の呟きが落ちてくる。
何て言ったか聞き取れず、目線を上げると――ひどく悔しそうな表情（かお）をした会長が叫んだ。
「だったら……どうすれば、お前の飯とかお菓子食えるんだよ!?」
「……は？」
「キスが駄目なら、金か!?　クソッ、幾ら払えばいいんだっ」
勝手に話を進めてキレる会長に、俺はしばし黙った。それから何となく手を挙げて、会長に言ってやった。

「えっと……こういうことしなくても、普通に食わせろって言えばいいと思います」

※

「土曜日、弁当作って来い」

確かに一昨日の朝、Ｓクラスに来た会長にそう言われた。

だけど逆に、会長はそれしか言わずに立ち去ったんで「真白に食べさせてる庶民料理を判定してやる」ってことかと思った。

「オレも食いたいっ」

「えっ？　せっかく遊園地行くんだから、店で食べた方が」

「はーい、俺もー」

すると真白と一茶もそう言ってきたので、クラスメイト達から睨まれる中（スルーしたけど）俺の頭は会長から「多めに作ってくか」に切り替わった。

だって、二人が食べるってことはもれなくペアの刃金さんと緑野もついてくるだろうし。かー君や双子も乱入する可能性があるからな。

……早めに作って、冷凍出来るおかずは冷凍しておこう。うん。

そんな訳で、一昨日の夜から準備をし。

今朝、中身はほぼ弁当のみの鞄（容器は捨てられるのにしたから、帰りは軽い予定）を持って待ち合わせ前の正門に行ったら――途端に空青と海青に捕まり、俺はバスの最後尾へと連れて行かれた。

「「おはよう、出灰！」」
「……はよ」
「おはよう、りぃ君」
「おはよ……って俺、ここに来ていいのか？」
床全面絨毯張りだけならまだしも、コの字になっててシャンデリアにテーブルありとか、何だこのＶＩＰ席？
（いや、まあ、生徒会用の席なんだろうけど）
そんな席にどうして俺が、しかも双子と書記、あとかー君の間が何で空いてる？
「「だって出灰、会長のペアでしょ？」」
「ってそこ、一つしか空いてないよな？　俺は、前の方にでも」
「……座、る」
「うわっ⁉」
「いらっしゃーい、お菓子食べるー？」
当然って言うばかりの双子の発言を却下し、離れようとしたんだが――その前に緑野に腕を引っ張られ、座らされた。
慌てて立ち上がろうとしたけど、それを制するようにかー君がポッキーを差し出してくる。
（何だ、こいつらの連係プレイ？）
助けを求める為、真白と一茶を探したけど――コの字の横部分に座った真白の横には副会長が陣取り、一茶はその向かい側に座ってニコニコ俺を眺めてた。
（……チッ、逃げられないか）
立っていても悪目立ちするんで俺は観念して座り、かー君がくれたポッキーを食べた。

一茶の隣には刃金さん、会長はその隣――っておい、良いのか？　何か会長寝てるけど、俺みたいな部外者が来て機嫌悪いんじゃないのか？

（あれ？）

そんな会長の向かい側、そして副会長の隣に見たことのない奴がいた。

黒髪ショートに、つぶらな黒い瞳。犬っぽいけどチワワって言うより、豆芝みたいな感じだ。

（……あ、生徒会の誰かとのペアか？）

だとしたら、俺と同類だ。気まずい思いをしているか、それともここにいる幸運に感激しているのか――そんなことを考えていた俺の前で、豆芝君がニッコリ笑う。

「初めまして、谷様」

「様？」

「ぼくは、月ノ瀬桃里（つきのせとうり）。高良様の親衛隊長です」

「……月ノ瀬？」

自己紹介をされて、誰かって言う疑問は解消した。ただし、何で様付けされるのかが解らない。そして少し変わった苗字は、俺の知っている人と同じだった。

「もしかして、桃香さんの……？」

「はい、弟です」

「……」

何だ、身内がいてしかも親衛隊長なら別に、俺が転校してくる理由はなかったじゃないか。まあ、桃香さんに聞いても「転校生ってところが重要！」とか言われて終わりそうだけど。

「それなら尚更、様付けなんてしないで下さい」

「……そんなっ！」
「えっ？」
「りぃ君りぃ君、許してあげて？」
会うのは初めてだけど桃香さんの弟なら尚更、様付けされるなんて冗談じゃない。
だから、と思って言ったのに、途端に泣きそうな顔をされてギョッとした。そんな俺の耳元に、かー君が顔を近づけて囁いてくる。
「とっ君、りぃ君のファンだから。様付け却下したら、可哀想から」
「……って」
「イラスト担当だから、俺のことも立ててくれてはいるけど……本命はりぃ君って言うか、三愛先生だから。むしろ、クリエーター名呼ぶの我慢してくれてるから」
かー君の説明に、またしてもギョッとする。一茶の時も驚いたけど、そんな様付けしてくるような読者さんとこうして会うとは思わなかった。
うん、でもクリエーター名呼ばれるのは困る。バレるバレないじゃなく、単純に恥ずかしい。
「……月ノ瀬、君？　あの、よろしくお願いします？」
「はいっ、谷様!!」
俺の本業については言えないんで、ぼかしつつまとめたけど――豆柴君改め、桃里君は満面の笑顔で答えてくれた。
「「出灰、あーん」」
「……食べ、る」

「あ、ポテチもあるよー？」
「……」
ああ、帰りたい。まだ目的地に着いてすらいないけど、出来ることなら帰りたい。
チョコにクッキー、ポテトチップスをそれぞれ差し出してくる空青と海青、緑野とかー君に対して俺は無言で口を開けた。色んな味が混ざって、口の中がちょっとカオスだ。
「……お前ら、出灰を太らせる気か？」
「あの、谷様お飲みものを」
そんな俺を気づかってか、刃金さんは呆れ声でツッコミを、桃里君は紅茶を入れてくれた。
「全く、随分と平凡に入れ揚げてますね」
「……オレも、出灰の横座りたかった」
「真白⁉」
「……運転中、立ったら危ないから。遊園地着いたら、一緒に何か乗ろうな」
副会長に「平凡が僕を差し置いて⁉」って目で睨まれたのに、俺は内心ため息をつきながら真白にフォローを入れた。結果、全くフォローになってなかったけど副会長、どうせ指名された相手とデートするんだよな？
（……って言うか俺、本当に会長とデートすんのか？）
一人、寝たままの会長を見てそう思う。狸寝入りだと思うけど、つまりは拒絶されてるってことだろう？　正直、嫌がられてまでデートなんてしたくない。
（さっき、真白にはああ言ったけど……弁当番とか理由つけて、バスに残ろうかな）
王道学園らしく、イベント不参加は許されないんだけど。とりあえず、遊園地までは来た訳だし。弁当は作ってきたから、会長も大目に見てくれるんじゃないかな？

（うん、桃香さん。やっぱり俺には総受け、無理）
と言うか、これだけ大人数に構われるのってしんどい。俺、聖徳太子じゃないんで、かなりいっぱいいっぱいだ。
（真白はよく相手出来てたな。流石、王道転校生は違うわ）
しみじみと感心していた俺の、ささやかな願いは叶わなかった。

「あの、弁当たくさんあるんで俺、バスで留守ば」
「行くぞ」
「……はい？」
遊園地に到着したんで、会長にお断りを入れようとしたんだけど――何故だか遮られて、弁当の入った鞄ごとバスから連れ出された。
「あー、紅河抜け駆け！」
「……真白」
「出灰は俺と、アレに乗るんだ！」
会長に名前を呼ばれた真白が、ビシッと指差したのはコーヒーカップだった。って随分、可愛らしいチョイスだな。
「デートではアレに乗ってはしゃぐと、好感度アップなんだろ？」
「……真白、それはどこ情報だ？」
しかも、相手に言っちゃうとか。そうツッコミを入れた俺は、悪くないと思う。まあ、胸を張ってる真白を可愛いとも思うけど。

「それは、女がやったらだろう？　ってか、お前こそ抜け駆けするな」
そんな俺と真白のやり取りに、刃金さんが乱入してきた。
背後から俺に抱き着いてきて言う刃金さんを、真白がキッと睨みつける。
「紅河と一緒にすんな！　オレはちゃんと、出灰と約束したんだからなっ」
「そうかよ、じゃあ……次はおれと、オバケ屋敷行こうぜ。出灰」
「なっ!?」
俺を腕の中に収めたまま、耳元でわざわざ甘く囁いてくる刃金さんに俺はやれやれとため息をついた。本当、この人ってオイシイところかっ攫うの上手い。
（そして真白は、刃金さんとだと口で負けちゃうよな）
性格なのか、本人はあまり言わないけど育ちの良さなのか――うん、両方だな。王道転校生だもんな。
「って言うか、一緒に乗ればいいんじゃないですか？」
「「……えっ？」」
「コーヒーカップ、四人まで乗れますよね？」
そこまで言って、俺は空気と化していた会長を思い出した。どこに行こうとしていたかは解らないけど、この後でも良いのか聞こうとしたら。
「……そうだな、行くぞお前ら」
「「「はっ？」」」
今度は、不覚にも俺まで声を上げてしまった。えっ、乗るの？　会長も、このファンシーなコーヒーカップに乗るのか？
「他にも乗るんなら、これの後に飯食うぞ。どの乗り物も結構、並ぶからな」

「……はあ」
「紅河……ああ、もうっ」
「……チッ」
到着後同様、話を進めて俺を連れて行く会長に真白と刃金さんがついて来た。
（あ、そっか）
そこで俺は、今更ながらに気がついた。
（会長、真白の気を引きたくて俺にちょっかいかけてるんだ）
『将を得んとせば馬を射よ』ってことだな。うん、それなら今までの意味不明な行動もスッキリする。
（俺様が、まさかの遊園地好きかって勘違いしそうになったぞ……それはそれで、面白いけど）
心の中で呟きながら、俺はコーヒーカップに乗った。そんな俺を挟んで刃金さんと真白、そして真白の隣には会長が座る。
「うわっ、スゲェ回るな！」
「……お前が、回してるからだろうが」
「……」
嬉々としてコーヒーカップを回す真白。そんな真白にツッコミを入れつつ俺の肩を抱く刃金さんと、無言（真白の可愛さをかみ締めてるのか？）の会長。
「りい君、こっち向いてーっ」
「谷様ー！」
「美形サンド、萌えっ」
「……こっ、ちも」

（コラコラ、お前ら。遊園地に来て、何をやってるんだ）
そして、何故かスマホで俺達を撮り出したかー君達と一茶達に、俺は心の中でツッコミを入れた――いつの間にか馴染んでる緑野が、ちょっとだけ心配になった。
コーヒーカップに乗った後、俺達は早めの昼を食べることになった。
……なったけど。
結果的に、ほとんど食べられなかったのは――頑張って多めには作ったけど思った通りかー君達や双子、あと副会長までが乱入してきたからだ。
ちなみに、双子と副会長の相手はいない。空青（ピンを右側につけてる）曰く「これ以上、分け前を減らされたくないから別行動♪」だそうだ
（相手さん達、よく訓練されてるよな……それにしてもこいつら、よく食うな）
「出汁！　この豚肉のアスパラ巻、美味いぞっ」
「いつでも嫁に来られるな」
「安来さん、相変わらず攻め攻めですね！」
「……コロッ、ケ、里芋？」
「この海老とブロッコリーのサラダ、美味しいよりぃ君♪」
「谷様、料理もお上手なんですね！」
「「唐揚げ、美味しいねっ」」
「よく、これだけ茶色いおかずばかり作れますね……まあ、何とか食べられますけど」
口々に言いながら食べていく生徒会の面々の中、会長も俺同様にほとんど食べていない。
文句を言いつつも食べている副会長より食べてないって、俺様どこ行った？

（一人っ子で、こう言う争奪戦に慣れてないのか？）
あくまでもきっかけだが、そもそも弁当を作ったのは会長が言ったからだ。
流石に可哀想なので、玉子焼きと唐揚げを一個ずつ取って差し出してやると――ちょっと驚いた顔をしながらも、素直に受け取って口に入れたんで逆に驚いた。
（あ、そうか。こうして給仕されるのが、当たり前ってことか）
とは言え、これ以上面倒を見るつもりはない。男なら、頑張って勝ち取れ――応援って言うより、背中を蹴るような気持ちでそう思い、俺はコロッケへと箸を伸ばした。

※

真白は、会長と俺のデートの邪魔をするって言っていた。刃金さんも、仲の悪い真白と手を組んだって言うことは同じ目的なんだろう。
それは確かに成功していて昼飯の後、連れて行かれたお化け屋敷（と言うか、ゾンビ館）では刃金さんと一緒だったし、次のジェットコースターでは何故か緑野と一緒に乗った。まあ、会長はどっちも真白と一緒だったんで良かったんだろうけど。
（帰る時間があるから、乗るとしたらあと一個かな）
俺としては疲れたから、ジュースでも飲んでのんびりでも良いけど――そう思ってたら、後ろから不意に腕を掴まれた。
「乗るぞ」
「……は？」

返事と言うか、間の抜けた声を上げた俺に構わず会長は歩き出した。
一瞬、遅れて気づいた真白達には構わず、観覧車に乗り込んだかと思ったらいきなり迫ってきて――そして、冒頭の展開に戻る。

恋心は下心

観覧車に乗っている時間は、意外と短い。
「言えばいいって……ふざけるな、お前に借りなんて作れるか！」
「すみません。いらないもの押しつけられる方が、迷惑です」
「……失礼な奴だな」
とりあえず、キスをするのは止まってくれたが、会長が俺に覆い被さったまま睨んでくる。
さて、どうするか。貸し借りってこだわるんなら、食費ってことで金貰えばいいのかって思っていたら。
……ガラッ。
言い合っている間に、下に着いていたらしい。遊園地のスタッフらしい人が、観覧車のドアを開け――俺達を見て、固まった。あ、そうだ、押し倒されたままだった。
「すみません、もう一回乗ります」
「はっ、はいっ」
俺がそう言うと、慌ててドアを閉めてくれた。本当は駄目なんだろうけど、まあ、貸し切りだからってことで許して貰おう。
「……おい？」
「会長様、とりあえずどいて下さい……どうして、俺の作ったものが食べたいんですか？」
そもそも、食べさせた覚えがない。ただ、こうなると弁当のリクエストも、単純に食いたかったからってことなのか？

俺がそう尋ねると、会長はようやく俺から離れてくれて――だけど向かい合わせじゃなく、俺の隣に座って口を開いた。
「……美味かった、から」
「えっ？」
「双子にケーキ、持たせたろう？」
言われて新歓前日に、炊飯器で作ったバナナケーキを空青と海青に持たせたことを思い出した。そっか、あれ食ってたのか。

「美味くて、媚びてなかったから」
「媚び？」

そう思ってたら、会長が何やら不思議なことを言い出す。
食後の感想らしからぬ内容に首を傾げていると、ため息と共に会長が口を開いた。
「昔から料理食ったら、作った奴が考えてることが解るんだよ。別に、信じなくていいけどな」
「……はあ」
「料理人だと、こだわりくらいだから気にならない。けど、手作りだと……媚びまくりで、味なんてろくに解らねぇ」
だから、お前の作ったものがもっと食いたくなった――そう言って、俺を見つめてくる会長を見返す。
（そう言えば、真白を気に入った理由も媚びてないからだよな）
感覚の話なんで、会長の話が本当かどうかなんて解らない。ただ、会長がそう感じるって言うんならそうなん

だろうし、俺の作ったものが食いたいって理由も理解出来たけど。
「……子供ですか？　会長様、やることやってるんでしょう？」
そう言った俺に、会長が大きく目を見開いた。
「気に入った相手に渡すのに、媚び……って言うと、言葉が悪いですけど。喜んで欲しいとか、振り向いて欲しいって思うのは当たり前ですよ」
「……知るかよ」
「そう言っちゃうのが子供なんです。会長様が媚びって感じてる気持ちの奥は、純粋ですよ？　まあ、気になって美味しく食べられない会長様としては、困るかもしれませんけど。プロが作ったものなら、食べられるんですよね？　餓死する訳じゃないんですから、いいじゃないですか」
チワワ達のことがあったんで、つい口を出してしまった。それから拗ねたような返事を返されて思った通り、いや、思った以上に子供なんだって痛感する。
（こうなると、チワワ達抱いてたのも『来る者拒まず』なのかもな）
あとは借りって言うか、弱みを見せたくないのかもしれない。見た目は大人（高校生）、中身は子供って面倒だな。逆だと名探偵になるのに。
「お前のは、食わせてくれないのか？」
だから余計なお世話だって怒られるかと思ったけど、代わりにまだ俺の作ったものを食いたいって言われて、ちょっと驚いた。うん、まあ、迫ってはこなくなったし。こっちの話を聞いて貰えるんなら。
「借りが嫌なら、食費貰いますね。明日にでも、何か作りますか？　食べたいものあります？」
「……嫌だ」
「は？」

「今夜、飯作れ」
……そう言った会長の唇が、何故だか俺の左頬へと触れてきた。

（油断した……真白もされてたけど、不意打ち得意なんだな）
とりあえず、唇にじゃなくて良かった。そう思いながら、俺は手でキスされた頬を拭って口を開いた。
「あの、だからこういうのいらないです……あんまりやるんなら、作るのやめますよ？　別に会長様、俺が飯作らなくても死ぬ訳じゃないんですし」
「やったんじゃない」
「えっ？」
「美味そうだったから」
「……お腹空いてるんですか？」
そっか、弁当ほとんど食えてないからな。仕方ない、真白達に夕飯作った後、届けに行くか。
ちなみに、俺の部屋で一緒に食べるって選択肢はない。真白と一茶が（それぞれ違う意味で）騒ぎそうだからな。
「解りました。夕飯作って、持って行きますね。何、食べたいです？」
「……スルーか？」
「？　えっと、嫌いなものとかあります？」
「ピーマン」
「子供か！」
どうも会話が成り立たないので、質問を変えた。その答えに、思わず突っ込んだ俺は悪くないと思う。

「……お前に、言われたくない」
「俺は、好き嫌いないですよ」
「そうじゃなくて……キスされたのに、動じないとか」
「だって、あなたにとっては飯の代金でしょう？　でも、キスは双方の同意が必要ですからね。親衛隊の皆さんならともかく、俺には必要ないですから……また、真白に怒られますよ？」
「違う」
「えっ？」
「今のは、違う」
そう言うと、会長はその両手で俺の両手を掴んだ。
それから状況が解らず、戸惑う俺をジッと見つめたまま唇の端を上げた。
「成程な、これが俺様が媚びだって思っていたことか」
「会長、様？」
「触りたいし、振り向かせたい……お前の目や耳こそ、飾り物だ。これだけ、俺様が口説いてるのに気づかないなんて」
「って……あの、真白は？」
「あ？　確かに、面白いが……あいつは飯、作れないし」
「ブレないですね、会長様」
一見、淡々と会話しているように見えるかもしれないが内心、俺は滝のような汗をかいていた。
振りほどけない手と、密着しているせいで上がらない足。そして会長の顔が息が触れるくらいまで近づいたのに、俺は一か八かで口を開いた。

「……ハンバーグ」
「っ!?」
「ロールキャベツに、クリームシチュー。モンブランに、ガトーショコラ……これ以上、こういうことするんなら作りませんよ？」
「……っ」
悔しそうに顔をしかめたかと思うと、会長は俺の肩にグリグリと頭を擦りつけてきた――良かった、とりあえず思い留まってくれたみたいだ。
（食いしん坊万歳）
そんなことを考えていた俺の耳に、再びガラッと言う音が聞こえる。
「すっ、すすす、すみませんっ、もう一回乗りますか!?」
「いえ、お構いなく」
さっきのスタッフさんと目が合ったのに、会長に懐かれたまま俺は動揺する相手を宥めるように返事をした。

「……我慢したんだから、全部、作れよ？」
「解ってます」
観覧車を降りた後、俺の横を歩きながら会長は言った。料理は、仕事に出た母親の為にするようになったんだけど――うん、覚えておいて良かった。芸は身を助くって本当だな。
「満足しなかったら、お前を食ってやる」
「どんな千夜一夜ですか」
「むしろ、赤ずきんじゃないか？　この口は、お前を食う為にあるってな」

「……料理って、言って下さいね」
恋は、下に心があるんで下心とも言うけれど――会長のは、随分と食欲の比率が高いと俺は思った。

※

「……俺の部屋に、作りに来ればいいのに」
「駄目に決まってるだろ!?」
「俺的には、それもアリなんですけど……すみません、今日は真白の顔を立てて頂けませんか？」
遊園地から帰ってきての、夕飯。部屋に届けよう（作って二人きりになるのは避けるとして）と思ってたが、行きと違って俺にベッタリな会長を見て真白が吠えた。
そんな訳で、どちらにしても煩いので会長に部屋に来て貰ってる。そして拗ねる真白を見て、一茶が腐った本音を交えつつもフォローしてた。
「出灰……大変だね」
「ありがとな。これ、土産」
「……ありがとう」
労いの言葉をかけてくる奏水に、遊園地で買った煎餅を渡した。ナムルとかが好きなら、甘いものよりこっちの方が良いかなって思ったからだ。
それは正解だったみたいで、奏水は嬉しそうに笑って受け取ってくれた。その笑顔に和みつつ、夕飯を用意して持って行くと――共有スペースが、いつもの美形（真白達）に会長が加わっていっそ無駄なくらいキラキラしてた。

（このキラキラが、実際の照明として役立てば節電出来るのに）
まあ、ここの学校の生徒で光熱費とかに気を配るようなのはいないんだろうけど。
何てことを考えながら、俺は作っておいたハンバーグを皆の前に並べた。弁当のおかずを作った時、ひき肉があったから一緒に作っておいて良かった良かった。
「……俺と紅河の、一茶達と違う？」
そのハンバーグを見て、真白が首を傾げる。
そう、一茶と奏水は大葉と大根おろしの和風ハンバーグにしたけど、真白と会長のはトマトソースの上にチーズを乗せたイタリアン風にした。二人ともお子様舌だからな。
「会長様、まだ食べちゃ駄目ですよ……いただきます」
「「「いただきます」」」
「……いただきます」
食べようとした会長を止めると、真白達の後、少し遅れて会長もそう言った。
今は三人も、俺に合わせてちゃんと言うけど――俺とこうして、一緒に飯を食うまでは誰も「いただきます」を言ってなかったらしい。
（一茶と奏水は寮生活長いし、真白も……一人で食うのが、多かったらしいからな）
さて、会長は「ごちそうさま」を言えるのか。そこまで考えて、俺はふと思いついた。
「会長様？　飯食わせるのは約束しましたけど、毎日だとむしろ会長様が時間合わせるの難しいですよね？　週一とか、都合の良い時にメールくれるとかにしませんか？」
「……それ、やめろ」
「えっ？」

「役職呼び」
　驚いて会長を見たら、ハンバーグを完食していてまた驚いた。って、食うの早いな。
「ピーマン入れてないんですから、つけ合わせの野菜も食べて下さいね。足りなかったです？　もう一個、食べますか？」
「今度は、目玉焼き乗せろ……って、そうじゃなくて」
　ハンバーグ、多めに作っておいて良かった（これで無くなるけど）と思ってたら、会長に訂正された。とは言え、俺にも言い分がある。
「親衛隊の方々に、許可を取ってからにします」
「……あぁ？」
「だって好きな相手のこと、勝手に名前呼びしたら嫌な気分になるでしょう？」
　まあ、ないと思うけど。性格良いし、そもそもチワワ達も『紅河様』呼びしてるしな。
（あ、様付けはしないと駄目かな？）
「……俺が、呼べって言ってるのに？　制裁が怖いなら」
「違います。あの方達はそんなこと、絶対にしません……ただ、これから飯作るんだからちゃんと筋を通したいだけです」
　チワワ達に対して、変な誤解をされたら困るのでキチンと否定した。そんな俺に、軽く目を見開くと――何故だか嬉しそうに、会長が笑う。
「約束、だからな」
「……？　ええ、そうですね」
「さっきの話だが……確かに、週明けから文化祭準備が始まるからな。忙しくなるから、食いたくなったら連絡

する」
「はい」
会長の言葉に頷いてから、俺は視線を感じて一茶を見た。そんな俺に、一茶が裏ピースをしながら高らかに答える。
「王道学園らしく、素敵出し物が盛り沢山♪　去年のうちのクラスは、劇だったよっ」
「プリンセス達が、王子の一茶を取り合う話だったね」
「魔法使いの奏水も可愛かった！　そして、俺って言うのが残念だったけどチワワ達は可愛かったよ!!」
そっか、女装がまかり通るのか――まあ、チワワ達は可愛いしな、うん。
「出灰のお姫様も、可愛いと思うぞ！」
「……こういう時は、お前がお姫様になると思うぞ、真白」
そして真白の言葉をやんわり否定し、俺はハンバーグと目玉焼きを作る為にキッチンへと向かった。

策略と思惑と

「髪を梳いてくれないかしら。あと、靴にブラシもかけて腰帯も締めてくれる？」
「このお皿の中に入ったえんどう豆、これを灰の山の中に投げるから、全部拾いなさい」
「そうしたら、パーティのことを考えてあげてもいいわ」
……そんな風に、パーティに行きたいシンデレラを、継母と義理の姉達はこき使う。
もっとも、それだけやらせても結局は連れて行かないんだけどな？
とは言え、俺はそもそもパーティ、もとい文化祭を満喫したい訳じゃない。
そんな訳で文化祭当日、俺は教室に用意された厨房スペースで一人黙々とケーキを焼いていた。
（童話と違って、ハトとかスズメに手伝って貰う訳にもいかないし）
「私を助けて」とか空に向かって呼びかけるってそれ、何てメルヘン？　仮に出来たとしても俺はやらないな、うん。

※

「喫茶店がいいと思います」
話は、数週間前まで遡る。
文化祭の出し物を決めていた時、そう提案したのはチワワタイプの奴だった。名前は話したことがないんで覚えてないが、よく睨んでくるんで他のチワワ達との区別はつく。

「喫茶店？　メイド喫茶？　それとも、執事喫茶？」
「柏原君……接客もだけど、どういう系統とか希望はある？　仕入れ先の手配もあるからね」
一茶がワクワクしながら言うと、委員長が苦笑しながらチワワに聞いた。
Sクラスにいるから、見た目＆家柄良しはデフォルトだけど、このクラスには珍しく真面目って言うか控えめなタイプだ。
そんな穏やかな委員長が、いや、クラスほぼ全員が驚くことをチワワは言ってのけた。
「それは、谷君に聞いたらいいですよ。作るのは、彼なんですから……生徒会の方々が絶賛するくらい、お上手なんでしょう？」
「あの……目黒君？」
「そうだね！　きっと谷君なら、このクラスの為に頑張ってくれるよねっ」
「逆に、僕達が手伝ったら足を引っ張っちゃうだろうし」
「ま、せいぜいガンバレなー」
妙な流れを感じたんだろう。委員長がチワワ（目黒って言うらしい）を止めようとしてくれたけど、他のチワワやガチムチも乗ってきた。
（うん、気に食わない俺をこき使ってやろうって訳だな）
王道学園らしく、白月ではほとんどのイベントを生徒で決めて動かす。橙司先生がいない今は、絶好のチャンスだろう。
そして面倒な役職を押しつけられている委員長に、これ以上を求めるのは可哀想だ。
「お前らっ」
「……真白、落ち着いて」

「流石に、一人は無理じゃないかな？　僕も、手伝」
「気持ちだけ受け取っておく。それこそお前らは、接客の方が人も入るだろうし」
怒鳴りつけようとした真白を、一茶が宥める。それから、奏水がフォローしてくれようとしたけど――俺は、それを止めた。
そんな俺に真白達や委員長、そしてチワワやガチムチが目を見張る。
（何だよ、俺を困らせたかったんだろう？）
ああ、泣きつくとでも思ったか？　とは言え、思い通りになってやる義理はない。
頑張ったからって、出来て当たり前。失敗したら、それこそ鬼の首でも取ったみたいに文句をつけてくるんだろう。だけど、やらないとやらないで面倒臭そうだしな。俺にとっては、こき使われる方が（主に精神的に）楽だ。
「じゃあ、手作りケーキの喫茶店で……それなら、メイドも執事も出来ますよね？」
うん、コスプレしないで済むだけ万々歳だな。

「……随分と、ふざけた連中だな」
「刃金さん、皆さん、気持ちは嬉しいですけど落ち着いて下さい」
昼休み、文化祭のことを話しに行ったらFクラスが一瞬で殺気立った。良かった、先に話しておいて――黙って後からバレたらもっと面倒になるところだった。
「一日頑張ればそれで済む話ですから。やらなきゃやらないで、また文句つけられるでしょうし」
「だけど、クイーン！」
「全く、女の腐ったような奴らだぜっ」

「同感だが……確かにおれ達が動いたら、余計に出灰の迷惑になるな」
「「「……」」」
不満そうな面々も、刃金さんの言葉を聞いて大人しくなった。まあ、これで嫌がらせがなくなるとも思えないけど、やらないよりはマシだ。
そんなことを考えていたら、自分の席に座っていた刃金さんが笑顔で膝を指差した。
それに俺は、キャッチャーからのサインに応えるピッチャーみたいに首を横に振る。
すると刃金さんは、今度は隣の空いている席を指差したんで俺は頷いてそこに座った――毎回断るんだから、まず自分の膝に座らせようとするの、諦めてくれないかな？
「このクラスは、文化祭では何をやるんですか？」
今のやり取りを見つめる……ガッカリしている？　（内藤さんは笑ってるけど）連中から話を反らす為、俺はそう尋ねた。
「控え室」
「……？　誰のですか？」
「おれらの」
何でも白月の文化祭には六月末のせいか、あるいは金持ちイケメン狙いか、近隣の高校生や大学生が大勢くるらしい。その為、外部からの目を気にして風紀委員の見回りも、いつも以上に厳しくなるそうだ。
とは言え、寮でサボることも出来ないのでＦクラスの出し物は毎年『控え室』にして、教室にこもっているらしい。
「出灰のケーキが食えないのは、残念だけどな」
「「「だよなー」」」

昼休みは限られている。そんな訳で、サンドイッチを食べながら聞いていた俺の頭を刃金さんが撫で、他一同がうんうんと頷いた。そっか、出歩けないんならSクラスにケーキ食べに来るのも無理か。
「よければ、試作品とか持ってきますか？」
当日は、ホールケーキを切り分けて出すつもりだ。練習でいくつか作ってみるつもりなんで、皆に持ってきてもいいだろう。
そう思って言った俺を、不意に刃金さんが抱きしめる。Fクラスにどよめきが走ったが、刃金さんは俺から離れない。
「……刃金さん？」
「……」
「キング、そんなにクイーンの差し入れ貰えるの、嬉しかったのー？」
「黙れ」
内藤さんがからかうように言うと短い、でも随分と低い迫力のある声で刃金さんが制した。そっか、嬉しかったんだ。
（可愛いな）
年上の、しかも不良達をまとめてるような人に、言うことじゃないだろうけど……こういうのが、ギャップ萌えって言うんだな、うん。
「そんなに喜んで貰えるなら試作品だけじゃなく、ちゃんと刃金さん用にも作りますよ？　あ、あんまり甘くない方がい……っ!?」
そこで言葉が途切れたのは、不意に抱きしめてくる腕に力がこもったからだ。と、耳元でボソリと刃金さんが言う。

「……そうやって甘やかしてると、いつか痛い目見るぞ」
（うん、まあ、今ちょっと痛いって言うか苦しいけど）
ただ、刃金さんが言うのはそう言うことじゃないんだろうし――俺は俺で、言い分がある。
「さっきのは特別扱いで、甘やかすならこうです」
「っ!?」
「出来ないことが多いんで、出来ることはしたいです……駄目ですか？」
好きだって気持ちに、同じ気持ちで応えられない。キス以上の行為を受けられないし、返せもしない。
だけど、たとえば今みたいに頭を撫でてみたり、食べたいものを作ったりとか――嫌いな訳じゃないって、俺も少しは示したいんだけどな。
（こういうのも『八方美人』とかになるのかね？）
恋愛の意味で好かれるのって本当、難しい。そう思い、こっそり俺がため息をついた時だった。
「駄目じゃねぇ……けど、妙なことされそうになったらおれを呼ぶか、最悪、相手を殺す気でかかれよ？」
「……はい」
それは過剰防衛じゃないかって思ったけど、刃金さんはそれだけ言って俺に頭を撫でられてくれたから――内心、許してくれたことにホッとしながら、俺は安心して貰う為に返事をした。
「キングー？　こいつらにはちょーっと、目の毒だよー？」
内藤さんに言われて、ここがFクラスだったのを思い出す。そして周りの面々は、刃金さんのイケメンオーラにやられたのか、赤くなって目を逸らしてた。
「全く。早速、面倒に巻き込まれて」

「……はぁ」
放課後、会長の親衛隊に先週、ごちそうして貰ったお礼をしに行ったら――開口一番、隊長にため息をつかれた。多分、文化祭のことだろう。随分と早耳だな。
「はぁ、じゃない！　クラスの出し物だと僕達、手伝えないんだからっ」
「あの、それはお気持ちだけで十分で」
「親衛隊はＳクラスに入れないのっ……その決まりがなかったら、ちょっとは手伝ってやらなくもないのに！」
「……ありがとうございます」
上からの言い方だけど、それはもうデフォルトだし。何より、差し入れに持ってきたクッキーを食べながらなんで、ただ可愛いだけだ。
だから俺がお礼を言うと、途端にワタワタし出した――これくらいで照れるなんて本当、普段苦労してるんだな。気の毒に。
そこまで考えて、俺はあることを思いついた。
「すみません、お願いがあるんですが」
「「何々っ？」」
「今度、ここでオーブンと炊飯器使わせて貰えませんか？」
「「「……え？」」」
身を乗り出してきたチワワ達が、俺の頼み事を聞いてきょとんとした。

数日後、結局、俺が会長親衛隊が使ってる教室に持ち込んだのは、オーブン二台に炊飯器二つ、そしてたこ焼き器（寮長から借りた）だった。

文化祭当日は、教室の隅でケーキを作ることになる。とりあえずはこれらを駆使して、どれくらいの時間で作れるか。それからチワワ達には言わないけど、これだけ調理器具を使って停電しないか確認したかったからだ。
「よっ、お前らが出灰のファンクラブか！」
「可愛いチワワ、ご馳走様ですっ」
「……真白、一茶。何か怯えてるみたいだから、自重して」
「大丈夫です。ちょっとテンションは高いですけど、怖いことはしませんから」
一人では運びきれなかったんで、真白達に調理器具を運ぶのを手伝って貰った。
普段、虐げられているせいかチワワ達がビクビク……って言うか、プルプルしていたんで奏水が二人を、そして俺はチワワ達を宥めた。
そして、セットしたオーブンや炊飯器でケーキを焼いてみたが……結論として、停電はしなかったけど全部を駆使して同時進行は無理だった。
一度にやろうとしたけど、泡立てた卵がどうしてもだれてしまう。これじゃあ、焼いた時に膨らまない可能性が高い。時間をずらして、材料投入までは集中してやった方が失敗しないだろう。
「まあ、プロじゃないしな」
「えっ？　こんなに美味いのに!?」
「そういうことじゃないでしょう……いっそ、テーブルの数少なくしたら？」
シフォンケーキやガトーショコラ、あとたこ焼き器で作ってみたドーナツ（全部、ホットケーキミックス使用だ）を皆で食べてると、隊長がそう提案してくれた。
「当日は、洗い物も入るでしょう？　あんたが大変だけど、テーブル少なくすれば調理室と行き来しても何とかなると思うけど」

「隊長様、詳しいですね！」
「……僕の家、元々は喫茶店だから」
一茶が褒めると、隊長は照れて赤くなった。うん、一茶が目輝かせるのが解るくらい可愛い。
「今はちゃんとチェーン店で、全国展開してるんだからね！　そうじゃないと、白月には通えないでしょう!?」
「そうですよね、ありがとうございます」
「べ、別に……」
照れ隠しか声を上げた隊長にお礼を言うと、プイッとそっぽを向いてしまった。うん、でも嫌われてはいないと思う。
様付けするつもりだったが「紅河様がいいって言うなら、別に」と言ってくれた。そんな訳で、会長のことは『紅河さん』って呼ぶことになっている（会ってないんで、あくまでも予定）
「調理室使うなら、冷蔵庫も使えば？」
「だったら、ロールケーキ作れない？　美味しいし、見栄えも良いよね」
「作れます……委員長に、冷蔵庫使えるか聞いてみますね。ありがとうございます」
流石、女子力の高いチワワ達だ。
ありがたく思ってお礼を言うと、隊長同様にツンッてなった――えっと、可愛いだけですよ？
（アドバイスしてくれたし、会長の名前呼びも許してくれたしな）

※

教室には、丸テーブルを三つ。

食器やテーブルクロスは、一日だけなんで百均で用意することにした。
「ゆったりとした店構えをイメージしました。これだと皆様への負担も減って、文化祭も回れますよね？」
嘘も方便。とは言え、元々が俺への無茶ぶりなんで駄目元で言ってみたら――そもそも手伝う気がなかったのか、あっさりとＯＫが出た。はいはい、せいぜい頑張りますよ。
「……ただ、お前らと委員長には負担でかいよな。悪い」
結局、接客は真白達、そして委員長が担当してくれることになった。
って言うか、俺への嫌がらせでこいつらにまで迷惑かけるなよ……でも、コスプレ以前に接客までは手が回らないんで、今回はお願いするしかない。
「気にすんなよ、出灰！」
「俺的には、真白と奏水のメイドが見られて満足だからっ」
「一茶……うん、でも気にしないでいいよ？　逆に、これくらいしか手伝えないからさ」
「……俺も。ごめんね、谷君」
何て言うか、委員長が恐縮してて本当、こっちが申し訳ない。他の三人には埋め合わせが出来るけど、委員長には何をどうお返しすればいいんだろう？
「謝らないで下さい、委員長……あの、今回俺のせいで本当に迷惑かけてるんで。俺に何か、出来ることないですか？」
「そんなっ、そもそも俺が押し切られちゃったからだから……谷君こそ、気にしないで？」
「……委員長」
天使だ、天使がいる。
金持ちの坊ちゃんにも、こんなに良い奴がいるんだなと感動していたら「あ」と委員長が声を上げた。

「藤郎（ふじお）」
「えっ？」
「足利藤郎（あしかが）。せっかくこうして話せるようになったから、委員長じゃなく名前で呼んで貰う……って言うのは、駄目かな？」
「駄目じゃないです」
「あ、敬語も無しね」
「……解った」
笑顔でそう言った委員長……藤郎に、俺は頷いた。
「えっ⁉　何で出灰、あんな素直に⁉」
「うわぁ、やるなぁ、委員長」
「無欲の勝利だよね」
そんな俺達のやり取りを見て、真白達がそう話していたことには気づかなかった。

灰かぶり君 =後篇=

発行日　2022 年 5 月 27 日

著者　渡里あずま（表紙　inika）
https://www.pixiv.net/member.php?id=45432486
連絡先　contact@rainbow.sakura.ne.jp
印刷　シメケンプリント / Adobe Stock

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。